

○屋敷 徹

(小児歯科こぐまクリニック)

【目的】

低年齢児の習癖は対象児の理解力の乏しさ故にその対応に困難を伴う。言語による説得で習癖の改善は望めない。今回習癖が原因の不正咬合をその習癖を利用して咬合の改善に導くことができたので報告する。

【症例】

初診時年齢1歳0か月の女兒。自治体委託事業の1歳児歯科健診を希望して来院。その際に生後8か月頃より萌出を開始した両側の上顎乳中切歯が1歳になってもほとんど萌出量が変わらないことを母親が訴えた。生後すぐよりほぼ一日中哺乳瓶かおしゃぶりを口に行っている。口腔内所見では上顎両側乳中切歯の萌出量は乳側切歯の萌出量に比べて明らかに少なかった。

【経過】

1歳児であるため言葉で説明して習癖を除去することは困難であることや、無理に習癖を除去することが女兒に強いストレスとなる可能性も考慮し、別のものを口にくわえさせることで乳中切歯にかかっている力の分散を計ることにした。具体的には歯列弓型のシリコン製歯がためなどをおしゃぶりの代わりに使用することを提案した。実際にはシリコン製の歯がためは嫌ったがリング状になった乳児用歯ブラシは受け入れた。昼間はそれを口に入れるようになったが夜間はまだおしゃぶりが離せなかった。しかし徐々に乳中切歯は萌出してきた。

【考察】

無理に習癖を止めさせようとしても成功しなかった可能性が大きい今回の症例でとった代替物をしゃぶらせる方法は小児に与えるストレスが小さくて済む割に一定の成果が得られた。萌出量は問題なくなったが上顎前突傾向があるので引き続き管理していきたい。